



Title	〈しんどうい学校〉の教員文化に関する教育社会学的研究――校区の社会経済的背景と教員の適応キャリア
Author(s)	中村, 瑛仁
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69301
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

	氏 名 (中村 瑛仁)
論文題名	〈しんどう学校〉の教員文化に関する教育社会学的研究 一校区の社会経済的背景と教員の適応キャリア
論文内容の要旨 本研究の目的は、関西地区の〈しんどう学校〉と呼ばれる校区の社会経済的背景の厳しい学校の教員に着目し、彼らが学校環境の厳しい勤務校に適応していく過程やその後のキャリアの動態を検討することを通じて、〈しんどう学校〉の教員たちに共有される教員文化の諸相を描くことである。 本研究では、Beckerが提示した勤務校の校区の社会経済的背景によって生じる教員のキャリア問題を中心的な問題関心として据えた。校区の社会経済的背景が厳しい学校においては、子どもの問題行動等によって教員は職務上の困難を抱えやすく、より仕事をしやすい職場環境を求めて異動を選択する「水平キャリア」の問題が生じる。他方で、そうした学校環境に適応し、勤務校での働きがいを見出していく「適応キャリア」を辿る教員も一部存在する。適応キャリアの教員は、厳しい職場環境の学校にいかに適応していくのか、その理由やプロセスはいかなるものなのか。本研究では、「校区の社会経済的背景が低位に位置づき、指導上の問題が生じやすい学校」を〈しんどう学校〉と定義し、他の学校とは異なる文化や歴史を有する学校として区別した上で、〈しんどう学校〉の教員に共有されている教員文化に注目した。その上で、本研究が有する研究的意義について、教員文化を一面的に描くのではなく教員世界内部の多層性を描く視座を提示する点、また教育の不平等の是正に資する教員の専門性を考察するための事例を提供する点などを述べた。 第一部では、まず第1章で先行研究を検討し、校区の社会経済的背景と教員の適応キャリアを吟味するための四つの視点を提示した。すなわち、学校環境、教員文化、教員の社会化、教員のキャリア問題、以上の分析視点であり、いずれの分析においても、従来の教員研究とは異なり、教員が働く学校の学校環境、特に校区の社会経済的背景との関連を分析の射程にいれること、そして、その中で教員世界の多層性を描くことの重要性を論じた。 続く第2章では、調査の概要として、調査対象や調査の経緯、調査方法やデータの分析方法などの概要を述べた。 第二部では、〈しんどう学校〉の教員たちの学校環境と、教職アイデンティティの特徴、社会化の過程、以上の三つの観点から〈しんどう学校〉への適応プロセスを検討した。第3章では、〈しんどう学校〉の学校環境を教員の主観的な世界から記述し、彼らが日々仕事を行っている学校環境を確認した。国際教員指導環境調査（TALIS）のデータも併用しながら、校区の社会経済的背景ごとに、教員たちの様々な教職経験を比較した結果、〈しんどう学校〉ほど、子どもの「規律の問題」「学習指導の問題」「保護者との関係課題」といった諸課題に直面しやすいことが整理された。〈しんどう学校〉では、まず学級の秩序の維持が求められ、学習指導だけに注力できない学校環境がある一方、保護者との連絡や連携、放任的な保護者との関係構築など、多様な教員役割が求められていた。 第4章では、〈しんどう学校〉の教員たちの教職アイデンティティの内実を検討した。インタビュー対象の教員たちは他の学校への異動（水平キャリア）を志向しておらず、むしろ〈しんどう学校〉にコミットする様子が見られた。彼らの教職アイデンティティの特徴を検討した結果、「働きがい」「パースペクティブ」「同僚性」の三つの観点によって把握された。教員たちは課題を抱えた子どもや保護者、さらに同僚との濃密な関係性の中で働きがいを感じており、教員たちは問題行動を起こしやすい子どもたちに対しても、彼らの家庭背景を把握するように努め、「つながり」を活用しながら彼らの包摂を目指すパースペクティブを有していた。そして教員たちは子どもの「荒れ」に対応する中で相互サポートや連携といった同僚間の協働文化（対向的協働文化）を形成していた。本論では、こうした〈しんどう学校〉の教員の特徴的な教職アイデンティティを、「民主的アイデンティティ」として位置づけた。 第5章では、〈しんどう学校〉の教員たちの社会化のプロセスを吟味した。彼らのライフヒストリーを分析し、教員たちが〈しんどう学校〉に適応していったプロセスを検討した。まず対象教員が〈しんどう学校〉独自のパースペクティブを形成してきた経緯には、「深化型」「喚起型」「転換型」三つのキャリア類型があることが確認された。ま	

た教員たちの〈しんどい学校〉への適応過程については、「葛藤」「省察」「コミットメント」の三つのフェーズによって整理された。適応キャリアの教員たちは、〈しんどい学校〉特有の学校環境の中で困難に直面しつつも、その中で自らのパースペクティブを繰り返し省察しながら、その状況に応じた教育実践を模索し、自らの教職アイデンティティを再構築しながら〈しんどい学校〉への適応を果たしていた。

続く第三部では、〈しんどい学校〉に適応した教員たちの、その後のキャリア問題に注目した。〈しんどい学校〉の教員たちが、Beckerが示す環境的要因や行政的要因によっていかにキャリアの変更が生じるかを検討した。事例では、教員のキャリア問題をもたらす要因として、「教員集団の変容」と「教育改革」を取り上げ、その中で〈しんどい学校〉の教員たちの葛藤や戦略をアイデンティティ・ワークの視点から分析した。

第6章では、A中の教員集団を事例に、教員集団の変容の中で経験される教員の葛藤や、葛藤に対する対処戦略を検討し、環境的要因と教員のキャリア問題との関係を考察した。A中では、学校の歴史的な文脈から要請される〈つながる教員〉と一般的な中学校文化の特徴が反映された〈しつける教員〉、以上二つの教員役割が観察され、教員集団内で一貫した指導方針を実践する「指導の一致」の要請のもと、二つの教員役割が競合し、それが教員の役割葛藤をもたらしていた。その役割が問い直される立場にあった〈つながる教員〉を志向する教員のアイデンティティ・ワークを検討した結果、彼らは「異化」「調整」「再定義」、以上三つの実践を通じて、自らの教職アイデンティティを維持しようとしていた。教員はそれぞれの置かれた状況の中で、要請された教員役割から距離を置いたり、あるいは集団の状況に合わせて適切な教員役割を選択したり、教員役割に対して新たな意味づけを行うことを通じて、自身にとって適合的な教職アイデンティティを保ち、〈しんどい学校〉でのキャリアを維持しようとしていた。

第7章では、大阪市を事例に、新自由主義的な教育改革下における〈しんどい学校〉の教員のキャリア問題を検討した。近年展開された大阪市の教育改革は、成果・競争主義を基軸とした新自由主義的な性格を有しており、それは教員たちに中央・行政に対して肯定的で、成果・競争主義を支持する〈競う教員〉役割を要請するものであった。一連の改革の中で教員たちは「管理統制の強化」「実践における裁量権の低下」「成果・競争主義の要請」といった変化を経験している一方、教員たちはこうした改革に対して、「異化」の戦略によって自らの教職アイデンティティを保とうとしていた。しかし、「矛盾の語り」「個人化の語り」を強いられる一部の教員たちは「異化」の戦略が不安定なものになっており、その葛藤を深めていた。事例では、〈しんどい学校〉の教員たちが自らの民主的アイデンティティと鋭く対立する〈競う教員〉役割を強いられる状況において、生徒と向き合う熱意はもちつつも、職業的な満足度、特に大阪市内で働き続けることの意味がゆらいでいる、彼らの不透明なキャリアの現状が観察された。

以上のように、本論文で見出された知見をまとめると次のように言えるだろう。校区の社会経済的背景が低位に位置づき、職務上の様々な課題を抱えやすい〈しんどい学校〉では、教員の水平キャリアと適応キャリアが存在する。水平キャリアを選択する教員は、保守化を伴った学校異動を選択していくのに対して、適応キャリアの教員は特徴的な学校環境の中で葛藤を経験しながらも、子どもの家庭環境や同僚の実践、そして自らの実践を省察しながら、自身の教職アイデンティティを再構築することで〈しんどい学校〉への適応を果たしていく。校区の社会経済的背景に特徴づけられた子どもや保護者、そして教員集団との社会関係の中で、教員のパースペクティブはより深まりをみせ、その結果、社会的に不利な立場に置かれた子どもたちの包摂を志向する民主的アイデンティティが形成されていく。

他方で、その後の教員のキャリアは安定的なものでなく、自身を取り巻く社会関係、そして教員言説の間の中でキャリアにゆらぎがもたらされるが、〈しんどい学校〉の教員たちは、単に「仕事のしやすさ」からキャリアを選択するのではなく、学校の状況や自身の立ち位置などを勘案しつつも、自らの教職アイデンティティに基づいて現実を解釈し、現実と理想との間で交渉しながら、その後のキャリアの在り方を模索していた。

以上の知見から、本研究では教員文化、教員の社会化、教員のキャリア問題、教員の専門性、これらの先行研究群への研究的示唆を述べた。特に本論の中心となる教員文化研究に対しては、教員世界には、異なる行動様式や志向性を共有する集団が存在しており、それが教員文化の多層性を形成していることを指摘し、その多層性を理解する上で校区の社会経済的背景に着目する意義を述べた。またその教員文化の多層性が形成されるメカニズムについて、校区の社会経済的背景によって生じる勤務校の職業的課題、その中で経験される社会化、その結果として形成される教職アイデンティティ、こうした一連の連関の中で教員文化の多層性が形成されている可能性を論じた。

最後に本研究の課題について言及し、特に本事例が有する限定性について論じた。課題に対応するために、本研究とは異なる校区の社会経済的背景の教員文化を描き、本研究と対比する必要があることや、本知見の妥当性を検証するためには、同和・人権教育の歴史を有する関西地区以外の地域を対象にした調査が必要であることを述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 村 瑛 仁)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	高田 一宏
	副 査	准教授	園山 大祐

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、関西地区の〈しんどい学校〉と呼ばれる校区の社会経済的背景の厳しい学校の教員に着目し、彼らが学校環境の厳しい勤務校に適応していく過程を検討することを通じて、〈しんどい学校〉の教員たちに共有される教員文化の諸相を描くことにある。

本論文は、3部9章構成をとっている。

序章で、問題関心とリサーチクエスチョンを提示したうえで、第一部（1～2章）では、先行研究の整理にもとづき、校区の社会経済的背景と教員の適応キャリアを吟味するための四つの視点（学校環境・教員文化・教員の社会化・キャリア問題）を導き出し、2章では調査に概要について述べた。

第二部（3～5章）は、本論の前半にあたる部分である。

まず3章では、〈しんどい学校〉の学校環境を国際教員指導環境調査（TALIS）のデータも併用しながら考察し、〈しんどい学校〉ほど、子どもの「規律の問題」「学習指導の問題」「保護者との関係課題」といった諸課題に直面しやすいことを明らかにした。

そのうえで4章では、〈しんどい学校〉の教員たちの教職アイデンティティの内実を検討した。インタビュー対象の教員たちは他の学校への異動（水平キャリア）を志向しておらず、むしろ〈しんどい学校〉にコミットする様子が見られ、「働きがい」「パースペクティブ」「同僚性」の三つの観点によって記述される教職アイデンティティを有していた。その中身は「民主的アイデンティティ」として位置づけうるものであった。

続く5章では、〈しんどい学校〉における教員たちの社会化のプロセスを吟味した。彼らには、「深化型」「喚起型」「転換型」という三つのキャリア類型があるが、いずれも「葛藤」「省察」「コミットメント」の三つのフェーズからなる社会化の過程をたどることが確認された。

第三部（6～7章）は、本論の後半にあたる部分である。

6章では、特定の中学校の教員集団を事例に、教員集団の変容の中で経験される教員の葛藤や、葛藤に対する対処戦略を検討した。そこでは、学校の歴史的な文脈から要請される〈つながる教員〉と一般的な中学校文化の特徴が反映された〈しつける教員〉という二つの教員役割が競合し、それが教員の役割葛藤をもたらしていた。その上で彼らは、「異化」「調整」「再定義」という三つの実践を通じて、自らの教職アイデンティティの維持を図っていた。

7章では、大阪市を事例に、新自由主義的な教育改革下における〈しんどい学校〉の教員のキャリア問題を検討した。成果・競争主義を基軸とした新自由主義的な性格を濃厚に有する大阪市の

教育改革は、教員に〈競う教員〉役割を要請するものである。生徒と向き合う熱意はもちつつも、職業的な満足度や市で働き続けることの意味がゆらいでいる、彼らの不透明なキャリアの現状が観察された。

終章では、以上の知見をもとに、理論的・実践的展望をまとめた。

本論文が主題とする教員文化というテーマはこれまで教育社会学のなかで継続的に扱われてきたものであるが、〈しんどい学校〉（社会経済的にきびしい状況下にある学校）に焦点をしぼり、教員たちの職場適応と教職アイデンティティの内実にここまで肉薄した研究はこれまで存在しなかったと言える。また方法論的にも、本論文は、教員の内面に迫るインタビューデータのナラティブ分析と教職に関する国際調査データの統計的分析を絶妙なバランスで上手に組み合わせしており、その点においても教育社会学の新境地を切り開くものと高く評価できる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。